あさ 5

2021

山巡り　　須賀忠男

谷川岳　1977m

トマの耳～オキの耳と呼ぶ
双耳峰で
関越トンネルの真上にある、
天神平から尾根道を歩いて
登頂する。

あを

五月集

紺朝顔　　佐藤　喜孝

雲雀野の中にわが家は建ってゐる

親の歳凌ぎてよりの日の永し

いぶかしとあたりみまはす落花かな

古池やかはづの波紋月を越え

何處までもまっただなかよ海の上

古里や鼈甲飴の中の泡

ミャンマーの木を蓋ひ咲く紺朝顔

ミャンマーの曉前よ紺朝顔

モーツァルトむかご零れてゆくやうに

迎春花

田中　藤穂

のぼりきし春満月を見よと呼ぶ
病院の夕食早し春蜜柑
花杏咲きみちしまま未だ散らず
医院まで道のり近し沈丁花
角入れば細道を黄に迎春花
出でゆきし子に春雷の鳴り止まず

春の雲

長崎　桂子

コロナ去れ只祈る春六地蔵
あれやこれ一人言いひ雛飾る
雨あがり寄せ植ゑの鉢さくら草
初花やフレイル痛のまだ癒えぬ
旗を振り土手ゆく園児花三分
花の昼乳母車連れ賑賑し
掃き集め大袋に春の奉仕
春の雲動物の会合の如

夕永し

森　なほ子

一回の二失点追ふ春の土
花時の朝のサプリのグルコサミン
春の暮滅多に鳴らぬ家電話
ハーバーにヨット上下す春北風
赤らみて鳥の足めくもみぢの芽
老猫に恋の昔やうららけし
花三分仮設トイレの真新し
工事場に痛と声あり夕永し

高田城址公園

赤座　典子

ホテル発観桜ツアー山笑ふ
極楽橋を一方通行花の雲
三重櫓木質構造風光る
祭なれど花見団子も「持ち帰り」
雪洞の濃き色花を翳ませて

花の冷え

秋川　泉

惜しまれて百貨店閉づ春の冷
次々と閉店の札春の闇
一万歩越えてへたばる春の夜
下萌や花壇の角に猫眠る
日脚伸ぶ三毛が茶トラを連れてくる
春雷や身をちぢこめて作句の日
深夜来る猫のごはんに花の冷
つっぷして泣く子にかかる花吹雪

花の雨

大日向幸江

菜の花や歩いて行かう農協は
夕べには菜の花づくし白ワイン
パンダ舎に居る気配なく紋白蝶
再開の動物園に花の雨
春暁やカサコソ飲むは熱冷まし
栃の木にカラスの巣ごもり鳥さかる

春多様

七郎衛門吉保

春北風ＬＡに似る山の火事
啓蟄や皮膚科ご用の七十路
春温し波郷石碑の反射光
逝きし兄今年俯瞰の花見かな
長閑さや無人ショップの服探し

花

篠田純子

兼好も西行も来て花見かな
優先順位なんか無視無視はるが来た
弁護士のメールは長し春の雨
木挽町から月島へ夜のさくら
自治会長に勝ちて三女史花の酒
防災拠点委員任命春の地震
コロナ終息せば何処へも蝶の夢
啓蟄や九九唱えつつウオーキング

三月のラヂオ

篠田大佳

三月やラヂオのこゑのふるへけり
三月十一日ラヂオ一分無音なり
春雷や微かに揺るる電気傘
論争の終はりて昼のあたたかし
弁護士へ菓子折贈る春の雨

匂鳥

須賀敏子

基地ありて金網越しの土筆かな
啓蟄や防災無線こだまして
岸青み小鷺の白さ極みけり
同じ樹を見上げる二人匂鳥
エプロンに甘夏柑の重さかな
いたづらに過ごす日もあり花大根
花吹雪ゆっくりペダル踏みにけり
菜の花や聖火リレーの始まりて

烝収集

あるかなしの雨の向かふは春茜　佐藤　喜孝

マンションのモデルルームに春日さす　須賀　敏子

臘梅を見にゆく馬車の動き出す　田中　藤穂

薄日さし春雪ちらちら舞台めく　長崎　桂子

夕暮は青空戻る春の雨　森　なほ子

朝霧の晴れて輝く北アルプス　赤座　典子

眠られぬ大寒の夜を烏鳴く　秋川　泉

嬰児の視線の先にチューリップ　大日向幸江

再びの揺れに怯えて二月尽　七郎衛門吉保

七十路の縄跳びダンス冬日向　篠田　純子

桜まじ人の気配のない普請　篠田　大佳

下萌や今日六千歩良しとして　須賀　敏子

山脈のやうな雲あり街早春　田中　藤穂

春一番わが家の庭にいつ吹きし　〃

梅の香の丘ありし日の友と椅子　長崎　桂子

百千鳥長き眠りの古墳塚　森　なほ子

春の雨めがねのふっと曇りける　赤座　典子

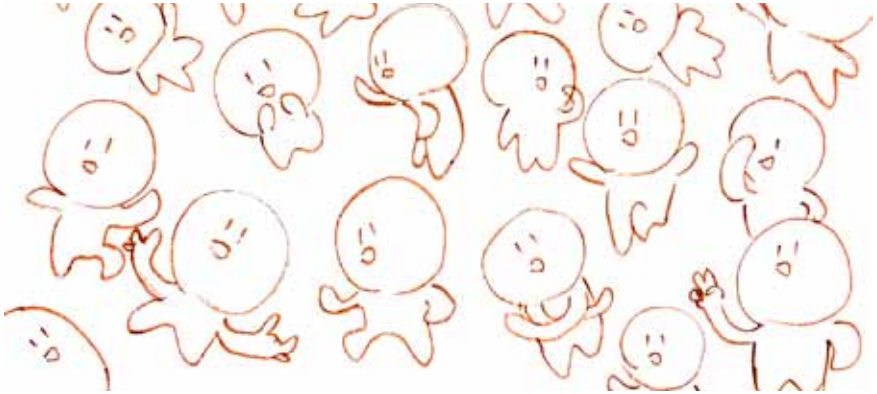
二の午や粒チョコレートお供物に　秋川　泉

透通る春夕焼や西病棟　大日向幸江

紅梅や大地にそぼろかけご飯　七郎衛門吉保

うららかや上長さんのひとりごち　篠田　大佳

喜孝抄



三月号作品より

篠田純子・篠田大佳・佐藤喜孝

種なしの柿にも種のありどころ　　佐藤喜孝

この句に「ジェンダーレス」を連想した。種の保存を超えた愛の有り様も、認める世の中になってきている。形をした子孫でなく、何かを残そうとしているエネルギーは素晴らしい。この柿は甘かろうと思った。（純子）

種無し柿は、種が完全にできないものと、小さな種が実の成長に伴って消えてしまうものがあるようです。後者の柿ならば、種のありどころがあっても不思議ではないですが、変異をしても変異前の名残が残っているところが、愚直で真面目な人間を連想して、妙な親近感を覚えます。（大佳）

心音のうるさき大学通り春　　篠田大佳

心音は作者の鼓動と思った。希望、好奇心、期待に膨らむ己の心拍数が、うるさいのである。気が散って集中出来ないのは、魅力ある女子大生の存在なのか。（純子）

三宅坂だらだらのぼり桜かな　　篠田大佳

三宅坂を歩いた記憶はないが長い坂でカーブをしてたやうな記憶がどこかにある。「だらだら」は坂のやうすでもあり歩き方にも読める。疲れてゐるわけではない。ゆったりと楽しんでゐるやうす。観桜しながらの「桜かな」のまったり感が面白い。（喜孝）

侘助やこの武蔵野に住み古りし　　須賀敏子

「武蔵野」という俳枕への情趣を、作者は「侘助」の季語に託して、冬の寂しい光景として描き出しています。下句「住み古りし」に五感が刺激されて、古い家のあたたかいにおいが伝わってきます。都市開発された「東京」の地層にある「武蔵野」が今も顔を見せます。（大佳）

お元日鳩も雀も水を飲む　　田中藤穂

人間は年中行事の祝日を休んでいるけれど、鳩も雀も一日を生き延びることを一生懸命考えて水を飲んでいる様子がうかがえます。野鳥さんたちも年酒やおせちを囲んで一休みというわけにはいかないのでしょうか。（大佳）

穏やかな朝日に映える実千両　　長崎桂子

朝日が穏やかに見えたのは、冬の朝というだけではなく、厳しい冬の一日に心が安堵するように読みました。千両ともなればおめでたい一年の始まりです。（大佳）

夜咄にもう狐火の出る頃か　　森なほ子

舞台は江戸時代でしょうか。取り止めのない雑談をしていて、雑談のつれづれに窓を覗いたりして、狐火のことを思いついたなどという光景が浮かびます。話題に乗り遅れて面白くなかったのかもしれません。まだまだ想像が膨らんでいきます。（大佳）

映像に曾遊の街福寿草　　赤座典子

外出ができずに、家で退屈に過ごしている様子がうかがえます。正月、テレビでは全国の様子がリレー中継されます。そんな中、見覚えのある景色が映し出されて、懐かしさと落ち着かなさを覚えたというように読みました。（大佳）

梵鐘の音響きたる御元日　　秋川　泉

元日に梵鐘の音が響くというのは、毎年の恒例のようにも思いますが、人出が少ない昨今、とりわけ梵鐘の音に思いを寄せてしまったのかもしれません。人の声が恋しくなっている寂しさとも読みました。（大佳）

春一番雄ライオンの猫なで声　　大日向幸江

たてがみのビジュアルと体の大きさから、強く勇ましい印象のあるオスライオンですが、風に意

表を突かれて、うっかりかわいい声が出てしまったようです。あるいは、動物園のライオンがびっくりして甘えた声を出しているのでしょうか。（大佳）

「閉店」の悔しげな文字春の砂　　七郎衛門吉保

コロナ禍による飲食店の閉店のお知らせ文と読みました。ビジネス街でも店舗用地の空き店舗は増えていますが、チェーン店の閉店のお知らせは大抵ワープロで書かれたもので、活字からは感情が読み取りづらいです。手書き文字で書かれた個人経営の人柄の良いお店の閉店を思わせます。

「春の砂」は手元の歳時記には掲載なく、季語としての用例は少ないですが、用例を通観すると、乾燥した砂の移ろいやすさや儚さを感じさせます。閉店の悔しさも、やがて風と消えてしまう寂しさを覚えます。参考mあでに、

春の砂浪さまざまに響きけり　　高濱年尾
春の砂こぼれやすさよそれに寄せて　　細見綾子
舌につく砂やさびしき春の砂　　小澤　實
春の砂払って穿かす嬰の靴　　綿貫伸子

（大佳）

寒風裡銀座にめをとのホームレス　　篠田純子

以前ほどではないですが、今なお都市部にはホームレスの人々が漂泊しています。彼らの身なり

や身の回りの物から彼らの人となりを類推するのですが、作者は夫婦のホームレスを見つけたようです。屋根の下とはまた違う寒さの中をふたりで生きている、ほんの小さなあたたかさを掲句から読み取ります。（大佳）

初すずめ七羽来たりて初喧嘩　　篠田純子

「七」といふ数字は何だか縁起が良ささう。七羽でも都会では結構な群雀。私の周りでは見かけない数。美味しい餌を見つけたのだらう。それ以外では雀に喧嘩の種はない。お正月のゆったりとした心でその喧嘩を楽しんでゐる。美味しい食事の差し入れは純子さんかもしれない。一句に「初」が二つも入りおめでたさが倍増。（喜孝）

佐藤喜孝

田中藤穂

春の陽の部屋中に充ち眠くなる
思ひ出の森繁久弥木瓜の花
ああさうだ今夜は東京大空襲

○春は夏と比べて日差しの角度が違ふ。大雑把にいへば二等辺三角形でない三角定規で大きな角度が夏。次に大きな角度が春。一番鋭角なところが冬の日差しの角度。日本家屋は開口部が大きく、光を部屋の中まで呼び込む。この様な部屋の中でうたたねをする。光も〝充ち〟てはゐるが、こころも満ち足りてゐるひととき。

○元句を「木瓜の花森繁久弥の思ひ出に」にしてみた。おなじやうだがどこかすっきりする。森繁久弥と木瓜の花がだうつながってのか分からぬが、藤穂さんにうかがへば「かういふことよ」とはっきりと答が返ってくる。万人に分からずとも作者がはっきり答を抱へてゐればそれはそれでよいと思ふ。

◎朝鮮民主主義人民共和国や大韓民国は今でもなにかと日本に物云ひをしてくる。それに比しても日本は民間人の無差別大量殺戮に対して「安らかに眠って下さい　過ちは繰返しませぬから」と碑文に刻む国民性。

東京大空襲、忘れるはずはないのだが……。何かをきっかけに「ああさうだ、今夜だ」と気がつき呟く作者。この幽かさが怖い。私の空襲の記憶は五月のやはり夜。

長崎桂子

数を増し明るさも増す黄水仙
風止めて雲間あちこち蜆蝶
のど自慢当選つぎつぎ島の春

◎黄色い色の花は、花そのものが光を発してゐるやうな明るい花。そのやうな色の黄水仙が咲き揃ふと一段と明るさが増してくる。感性豊かな俳句である。

○難しい作品。「風止めて」は蜆蝶が風を止めたやうにも読めるし、誰かにお願ひしてゐるやうにも読める。蜆蝶は雲間をあちこちと空高く飛ぶイメージがない。などと迷ひ桂子さんのイメージに辿り着けなかった。

○「のど自慢」はＮＨＫの日曜昼の公開番組のことだらう。だとすると「当選」ではなく「合格」

かも知れない。どこかの島の春の昼下がり。合格者が次々と出て鐘を鳴らす。「島の春」は簡にして要を得てゐる。のどかな日曜の春の昼下がりである。

森なほ子

注射針刺さる誰が肌春寒し
ガンダムは横浜に居る日永かな
砂利道に咲いてしまひし菫かな

◎毎日コロナの報道で埋まってゐる。ワクチンを注射する映像を何回か見た。他人様の大写しの肩に針が刺される。痛さうだ。この句はこの辺りのことを詠まれたのかと想像した。「誰が肌」を大写しで見る機会はさうあるものではない。季語は内容に沿ったものと、反対のイメージの季語を付けるときとある。どちらにしても計らひが見え隠れしむづかしい。

○ガンダムはアニメの世界にゐるはずだが、横浜に居ますと。私は「ガンダム」に疎いが、七郎衛門吉保さんも関心があり「等身の動くガンダム冬ぬくし」と詠まれた。これだけの巨大なものを人に作らせるエネルギーをガンダムは持ってゐる。魅力のある証左。「日永かな」に時の流れをしづかにうけとめる気配を感じた。ガンダムは四十年ほど前に誕生とか。我が家の子供が興味を持っていれば私も善光寺参りをしてゐただらう。

○「菫」はか弱いやうだが道の辺によく見かける強い草だとみてゐる。この句の菫は菫にふさはしくない所に咲いてしまったと云ふ。「砂利道に咲いてしまひし」か「砂利道に咲いてゐるなり」か推敲時行きつ戻りつするところです。

赤座典子

残雪や棚田の畦に白き帯
雪戻し済みし水田の静まれる
鴨農法の春田ありけり十日町

○棚田はいま人気スポットのひとつ。四季折々にその美しさを求めて人が訪れる。その美しさを保つ作業に苦労されるさうだ。早春の棚田の光景が浮かんでくる作品となった。
◎「雪戻し」は初めて聞く。いったん除雪して積み上げた雪を春になり早く融かすために、元の場所に戻すこととあった。水田の雪がどこかへ運ばれたのだらう。雪戻しは小学館の国語大辞典にはない。新しい言葉なのだらう。そのうち歳時記に収録されさうな言葉だ。
○合鴨に水田の草取を手伝ってもらふのをテレビで見た。鴨農法とはそのことであらう。これなら水田に目高や田螺が棲める。春田にはもう鴨が働いてゐるのか。春のこのころ、鴨農法の鴨はだうしてゐるのだらう。

秋川　泉

病む人の窓辺静かに花吹雪
地に伏してのぞき見したる朧月
いっせいに咲き揃ひたる花水木

○病院の窓であらうか。自宅の窓辺であらうか。どちらにしても窓の外は花が咲き溢れて一陣の風に吹雪となって舞ふ。通常華かな光景にこころも浮き立つところだが、この窓辺には静かに花が散って舞ふ。「花吹雪」の季語がこの窓辺に合ふのかなと思った。
○地に伏した状態。自発的にさうしたのか、転ばれたのだらうか。その状態から月を覗き見たと。特異なケースのやうなのでもう少し表現をサービスしてほしい。
○花水木に限らず花が一斉に咲き揃ふさまは見事である。あまりの見事さに表現は無難になった。「一斉に」・「揃ひたる」は同義語。どちらかを使ひたい。また花水木でなくとも成立しさう。花水木だなあといふ表現が欲しいものです。

大日向幸江

退院の意気込みもなく弥生尽
カステラを土産に蟻の凱旋す
万緑の梢に眠るシンデレラ

◎病気や怪我で入院するときから退院の日を夢見る。幸江さんは病を抱へ入退院を繰り返してゐると側聞する。「意気込みもなく」退院の日を迎へると幸江さんはつぶやく。簡単に推し量れない重さ。
○写真家の名前は忘れたが、この句からすぐに一枚の写真を思ひ出した。一匹の蟻が蒲公英の種を高々と掲げて運んでゐるところである。この句、童話のやうに楽しい作品。大きな戦果のカステラを声かけあって運んでゐるかもしれない。このおみやげのカステラの贈り主は幸江さんではないかな。
◎シンデレラは私には白い衣装のイメージだ。シンデレラはある意味で女性が描くあこがれ象徴。ありえない場所で眠るシンデレラ。おもしろく読ませていただいたので二重丸。

七郎衛門吉保

縞馬の皮を剥ぎたる雪解の田
雪解水溢れて道の反射鏡
雪解の田オセロゲームの昨日今日

○縞馬の皮を剥いだイメージが湧かない。湧いても雪解田に合はないのだ。巨大な因幡の白兎が浮かんできてしまふ。「縞馬の模様のやうな雪解の田」では吉保さんのイメージではないのだらう。実際に雪解田を見ればああさうかと納得するのかもしれない。
○雪解け水が道にあふれ出る。春になりました。その道に立ってゐる反射鏡、別名道路鏡を詠まれた。このカーブミラーの言い方は「道路反射鏡協会」があるので道路反射鏡が正式名かも知れぬが調べてはゐない。この句一字替へて「雪解水溢れて道は反射鏡」にすると雪解水で光った春の気溢れる俳句になる。
○オセロゲームで昨日は負けたが今日は勝ったといふ句ではない。雪に被はれた田が今日になると解けて黒くなったと詠んだ。本当のオセロゲームではまた白に逆転もあり得るが、このオセロゲームは黒の勝利で終はる。

篠田大佳

マゼンタのトナーのひかる春の書
過労して道に出づれば桜まじ
花明り己が足跡見うしなふ

○トナーはレーザー・プリンターやコピー機に使用する粉状のインク。低価格なプリンタは黄色と

青と赤紫（マゼンタ）そして黒で構成されすべての色を表現する。この三原色のうちのマゼンタのトナーが春の晝にひかってゐると。トナーそのものは光らない。春光を得てのこと。春の晝のイメージを色を用いて詠まれた。「春の昼」ではなく「春の晝」と書きゆったり感が一段とよく表はれた。字体を表現の一部として使はれた作品。

最近目にする俳誌、句集の使用漢字は一部の漢字を除いてすっかり新字体になった。旧字体が遺っているのは蟬・鷗・鶯・蠅・摑ぐらいか。漢字はただの記号と化しつつあるか？。漢字もひらがな、カタカナも記号ではなく詩の大切な部品です。恋と戀では字体の新旧だけではすまぬ問題があります。「ひとつひとつのことばがそれ自身文学であり詩であった。（ヘルデル）」

○作者にしてはおとなしい句。おとなしいことと句の良し悪しとはかかはりない。季語が次々増えていく感がするのは私の不勉強だ。季語が生きた句。季語で生きた句。

○「足跡」をソクセキと読むかアシアトと読むか雰囲気が違ってくる。雰囲気は違ふが意味は大差ない。私は「アシアト」と読んだ。花の下、ふとそんな気になったのか。桜花はときにまがまがしい面を見せるときがある。

須賀敏子

啓蟄や猫そそくさと通り過ぎ

猫探すポスター見たり花の中

「猫を棄てる」村上春樹黄砂降る

◎啓蟄の頃は虫とはいはず猫もまた忙しい時期。いつもの猫がいつもと違ひそそくさと敏子さんの前を通り過ぎていった。「そそくさ」といふ日本語はおもしろいですね。「そそくさ」の英語訳はあるのだらうか。「そそくさ」の日本語訳すら難しさう。調べたが辞書によりさまざま、良い訳が無ささう。「そそくさ」は英語でもそそくさが良いやうに思った。英語に全く不案内な者のたはことです。

○猫探しのポスターを貼った人は本当に本当に心配しての行動。いまは猫探しのプロもをられるが。ところが敏子さんは傍観者の感が「花の中」に伺へる。立場の違ったちょっとしたずれがおもしろい。

○敏子さんは読書家。多岐にわたって読書されてをられるやうす。副題は「父親について語るとき」アマゾンに「時が忘れさせるものがあり、そして時が呼び起こすものがある。ある夏の日、僕は父親と一緒に猫を海岸に棄てに行った。歴史は過去のものではない。このことはいつか書かなくてはと、長いあいだ思っていた。―村上文学のあるルーツ。」と。感銘した読後感を「黄砂降る」に託した。

桜

北上川

田中藤穂

弘前の桜をみようと、主人と私と私の友達三人で出かけたのは、もう何十年前になるだろう。弘前城の前に北上名勝地という處に寄った。初めて見た東北の桜。北上川上流の流れをはさんでその両岸はびっしりと咲いた桜は、関東でみる桜よりも花びらが厚く、色も濃いような気がした。

子供や乗客をのせた馬車が、シャンシャンと鈴の音を響かせながら川の両岸を走っていた。私達はそれに乗る時間はなかったが、今もあの桜の馬車に鈴の音は心に沁みついて離れることがない。

母の「普賢象桜」

秋川　泉

私の二十歳の記念樹「染井吉野」。三年前から始まった密蔵院の客殿、庫裏の建設工事。設計士、建築士がその時咲き誇っていた染井吉野の大樹を見て「客殿正面玄関の大窓から額縁のように、この染井吉野を入れた景にしたい」と、工事は始まった。しかし、少しの設計ミスで桜の位置がずれた。それで、もうこの桜はいらない。別の案をとなった。寺は本堂のみを残し、建物、境内の全てが新しくなった。

こんもりとした丘にあった染井吉野は、村の人々がお花見を楽しんでくれた。その地続きが、苔むした庭に秋海棠とポポー樹の茂る安らぎの内庭だった。しかし、今そこは草も木も無くした岩と石の庭として設計され、工事が進んでいる。

「普賢象」は、私の母の自慢の桜だった。

なにもかも消え去り、本当にうつせみの世としみじみ思うのである。

同じ桜

大日向幸江

桜は私の目の前に満開になる準備をしている。どこの場所か私には分からない。

入学式、卒業式そして入社式。節目に桜の花は咲いていた。歓びに溢れた春。別れの春。

また別の場所で同じ桜と会いたいね。

左近の桜

篠田大佳

『徒然草』に取り上げられた「左近の桜、右近の橘」を見たいと思い、大学の卒業旅行で京都御所に行きました。夜行バスで京都に着いた朝一番に行ったので、とにかく欠伸の出る見学でしたが、紫宸殿の桜と橘が想像していたよりも小さかったことが記憶に残っています。

凹

子子の凹地の水も干上りぬ　竹内　弘子
皿屋敷幕間の幕凸凹す　佐藤　喜孝
参道の凹みふくらみ花の風　佐藤　恭子
子の百会やや凹みをり進級す　竹内　弘子
凹み石なみなみとある菖蒲雨　佐藤　恭子
如月や席の凹みに収まらず　赤座　典子
凸凹の地球枯葉のからみつく　佐藤　恭子
でこぼこが凸凹に地球さくらの芽　佐藤　恭子
体内の螺髪の凹み暑きまま　赤座　典子
地下鉄のへこみし座席夜の秋　鎌倉喜久恵
籐椅子のへこみ父在す日の記憶　竹内　弘子
鳩尾のへこみが父似海びらき

舳先

春の海進めば舳先泡立てり　長崎　桂子
ペスト
孫と読むカミユのペスト四月尽　篠田　純子

臍

万頭にも臍のある梅三分　堀内　一郎
きさらぎや蒸し万頭の臍に紅　東　亜未
春の塵吽像の臍大いなる　田中　藤穂
秋津国の臍の辺りも梅雨に入る　竹内　弘子
筒姫は次女で出臍にはあらず　佐藤　喜孝
日本の臍はフクシマ深雪晴　大日向幸江
春めくや臍のピアスの煌煌と　秋川　泉
鉄橋の月に臍あり終電車　竹内　弘子
薄紙に臍の緒なども黴をらむ

下手

口下手の喉にするりと心太　鈴木多枝子
着水の下手な鴨ゐて飽きもせず　須賀　敏子
親に似て口下手母の日の電話　田中　藤穂
箸づかひ下手なるままに蕨餅　篠田　純子
うぐひすに上手下手あり虚子の墓　井上　石動
つくづくと世渡り下手やシクラメン　中川句寿夫
遣り繰りの下手な分だけ茄子太る　定梶じょう
祝儀の辞下手であたたかなれば聴く　佐藤　喜孝
はなうたに上手下手なし笹子鳴く

蓆

おしなべて蓆と皮なり柿の梢　長崎　桂子
蓆をとり啜ってごらんよほら熟柿　斉藤　裕子

隔つ

死を隔て見す冬暖の星一つ　渡邉　友七
吊革が等間隔に春の河　佐藤　喜孝
死を隔て見ず冬の草星一つ　渡邉　友七
満月が分け隔てなく聖夜かな　須賀　敏子
金魚玉ひとを隔つは隔てらる　竹内　弘子

ペダル

卯の花の垣根に沿ひてペダル漕ぐ　須賀　敏子
ペダル踏む少年の背に夏兆す　鈴木多枝子
自転車のペダルゆつくり麦の秋　早崎　泰江
ペダル踏む東風に向へば潮の香　長崎　桂子
炎熱に眩しい日差ペダル踏む　長崎　桂子
春風やペダル漕ぐ靴真新し　黒澤　佳子

別

夏帽子かぶれば別の顔になる　栢森　定男
どろぼうと別の名のありゐのこづち　鈴木多枝子
人の世とは別とんぼが池の上空を　高橋　信佑
風音と梅ひらく音別にあり　堀内　一郎
別の名を齢草とふ菊の花　木村茂登子
写経する素秋高野の別世界　七郎衛門吉保
春愁の欠片も見えぬ別世界　赤座　典子

別人

釣瓶落し別人の我立つやうな　芝　尚子

別に

首塚と別に胴塚鵙日和　佐藤　喜孝
風音と梅ひらく音別にあり　堀内　一郎

別々

年行くや別々にラジオ深夜便　竹内　弘子
別々に来て旧知めく田芹摘　竹内　弘子
かへる道みな別別に冬の暮　田中　藤穂
兄妹墓は別々寒椿　田中　藤穂

ベトナム

ベトナムの二色の稲田三期作　七郎衛門吉保

紅

初芝居土産の京紅そつとさし　芝宮須磨子
鶏頭を心に紅を引きにけり　河合　笑子
粉雪や飛騨は紅緒の下駄を売る　田中　藤穂
絵手紙の千日紅に紅を溶く　斉藤　裕子
大皿にはなびらのごと牡蠣の紅　赤座　典子
きさらぎや蒸し万頭の臍に紅　東　亜未
きはちすの白き小鉢に紅の芯　赤座　典子
紅筆の走りて生まる唐辛子　鎌倉喜久恵
紅買ふて十一月の旅仕度　斉藤　裕子
届きたる紅色深し冬林檎　須賀　敏子
紅き芽の並び初めけり猫柳　鎌倉喜久恵
薔薇咲く日口紅買ひに家を出る　森山のりこ
枯山水千両一本紅をさす　長崎　桂子
白桃に一抹の紅宵の湖　長崎　桂子
紅つけてぼけのきざしの雪をんな　佐藤　喜孝
口紅のにじむ立体マスクかな　篠田　純子
ファゴットの紅の美し春隣　赤座　典子
まだ柔し母に紅さす花の朝　斉藤　裕子

あとがき

日本名著全集・俳文俳句集　興文社版

前月の続き。この本の魅力は贄川他石の解説にある。せめてこの解説だけでも通読したい。もうひとつ句集・俳文集の表紙が写真で紹介され、序文は影印と活字のに段組み、句は三段組と文庫本を一回り大きくした小型本だが内容充実度といひ、雰囲気といひ満足する。なかでも『誹諧職人盡』は様々な職業が挿絵と誹諧で紹介されてゐる。今はほとんどない職業が並んでゐる。「はりすり」は針の再生をするのだらうか。また「穢多」がある。職業として扱はれてゐる。江戸百科小事典である。当たり前だが何でも人の手で作られてゐたと改めて思った。

国会図書館

私が暖流賞受賞年をネットの国会図書館で探した。探し当てたが内容は見ることはできなかった。篠田大佳さんは国会図書館の会員でコピーを依頼できると教へて頂きお言葉に甘えてお願ひした。いつの間には忘れてしまった滝春一先生の温かいお言葉を目にして感慨一入である。大佳さんありがたう。

短文のお願ひ「気に入りの筆記具」

今手紙を書く機会が少なくなった。妻に大切な便りはボールペンでなく万年筆にしたらといった。私は粗忽、悪筆の二重苦で手紙は苦手。瀧先生への投句は鉛筆で薄く書き、確認してボールペンでなぞり消しゴムで鉛筆を消してゐた。

皆さんのお気に入りの筆記具のことをお書きください。

（喜孝）

二〇二一年五月号
発行日　五月十五日
発行所　東京都中野区中央2-50-3
電　話　090　9828　4244
ファックス　03　3371　4623
印刷・製本・レイアウト　竹僊房
カット／須賀忠男・福井美佐子・ティリ　エイマ
表紙・佐藤喜孝
会費　一〇〇〇円（送料共）／一年
ゆうちょ銀行（普）（店番　018）4586402
佐藤　喜孝（サトウ　ヨシタカ）